

なくそう！ 運動部活動の事故



運動部活動中に発生する事故について、未然に防ぐ努力をしましょう！

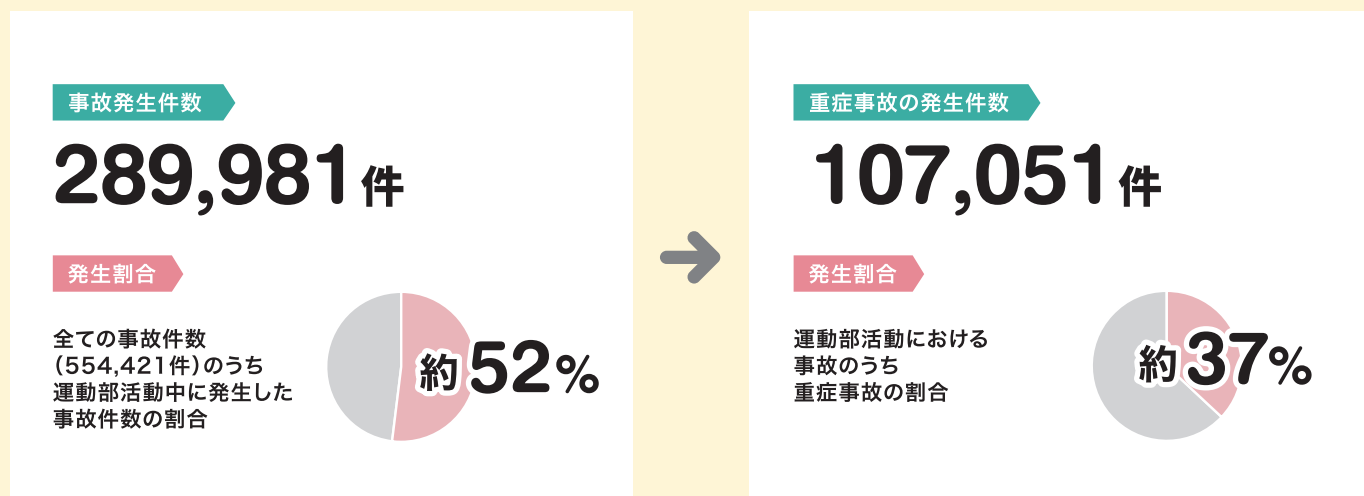


本パンフレットは令和元年度の災害共済給付（医療費）のデータから、中学校・高等学校等・高等専門学校で発生した運動部活動の事故約29万件のうち、重症事故※の約10万7千件を対象にデータ分析を行い、事故防止の留意点をまとめています。

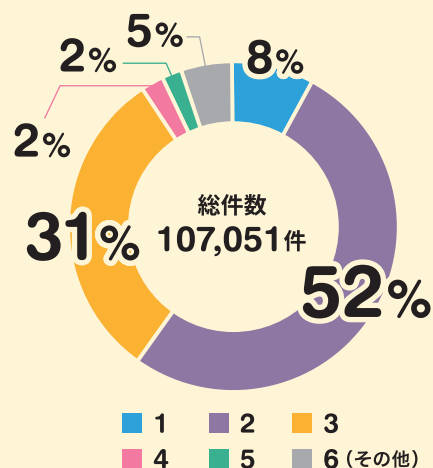
安全な運動部活動の実現に向けて、ケガの現状を把握・認識し、予防策について考えてみましょう！

※重症事故：本パンフレットでは、骨折、靱帯損傷、頭蓋内損傷（硬膜下血腫、脳しんとうなど）、半月板損傷、頸髄損傷などをいう。

数字で見る運動部活動における事故発生状況



運動分類別の重症事故発生件数の割合



	分類	主な運動種目	事例と事故防止のポイント
1	人との接触が必須な運動	ラグビー、柔道・剣道・空手等の武道	… 3 ページへ
2	ボールを介した接触が起こりうる運動	バスケットボール、サッカー・フットサル、ハンドボール	… 4 ページへ
3	バットやボール等を使用し、原則接触が起きにくい運動	野球（含軟式）、ソフトボール、テニス、バドミントン、バレーボール、卓球	… 5 ページへ
4	概ね用具を使用せず、個人で行う運動	水泳、陸上競技（短距離走、持久走・長距離走、走り幅跳び）	… 6 ページへ
5	用具を使用し、個人か少人数で行う運動	器械体操・新体操、陸上競技（障害走（ハードル）、円盤投げ、走り高跳び、投てき）、自転車競技、スキー等	… 7 ページへ

重症事故発生件数の割合のうち上位を占める5つの分類ごとに、重症事故の事例と、事故防止ポイントをまとめました。

また、概ね全種目で共通する、準備・整理運動と筋力トレーニング時にも多くの事故が発生しており、**準備・整理運動での事故発生件数は、3,956件、筋力トレーニングでは4,760件となりました。**

準備・整理運動での事故防止 … **8** ページへ

筋力トレーニングでの事故防止 … **9** ページへ

※準備・整理運動、筋力トレーニングでの事故発生件数は、重症事故のみでなく、運動部活動の事故を対象としております。

人との接触が必須な運動

主な運動種目 ラグビー・柔道・剣道・空手等の武道

ラグビーでは、不可抗力で起こる事故がある一方で、タックルを受けた際の転倒の仕方やタックルに入った際の接触回避等の技術が未熟な生徒による事故、体幹・頸部の筋力不足が一因となって起こる事故が見られます。また、柔道・剣道・空手等の武道は、技術や体力、筋力が不足している初心者に事故が多く発生している傾向にあります。



事例と事故防止のポイント

			
	タックルを受け転倒、頭部強打	タックルをし転倒、人が体に乗る負傷	転倒時についた手に体重が乗り骨折
事例	ラグビーの大会に出場中、相手選手からタックルを受けて転倒し、地面に頭部を強打し、頭部と頸部を負傷した。負傷直後は、意識がなく、気がついたときには、ベンチに座っていた。翌日、病院へ行った。 (頭部外傷、外傷性頸椎症、脳しんとう)	ラグビー部の試合中、相手選手をタックルして倒れた時に、他の選手が上から倒れてきて頭部を強打した。(急性硬膜下血腫、頭部外傷、頸椎捻挫、腰部打撲傷、右大腿打撲傷、左肘関節打撲傷)	柔道部で乱取りの練習をしていたところ、投げられて肩から落ち、鎖骨を負傷した。 (右鎖骨骨折)
事故防止のポイント	タックルを受けて倒れる際に手を突かないようにすることや、顎を引き、頭を地面につかないようにすることが重要なポイントである。特に下級生に対しては、このような基本技術を繰り返し丁寧に指導することが必要である。また、頭部を保護するために、ヘッドキャップ等を適切に使用しなくてはならない。	タックルの練習は、膝つき、立位、歩行などの順に段階的に行うことが重要である。また、飛び込むようなタックルは、ボディコントロールができずケガにつながりやすいので、足をしっかり地面につけてタックルすることを指導したい。また、万に備え、バックボードやネックカラー等、事故の際に迅速に対応するための準備も重要である。	技術や体力、体格に差がある生徒が練習する際は、ベアの作り方等に十分な配慮が必要である。練習メニューについても、基本技術の習得が不十分な下級生に対して、上級生と同じ練習を強要してはならない。また、筋力トレーニングや体幹の強化もケガ防止に有効であるので継続的に実施することが望まれる。
			
	背中から落ち、後頭部の強打による脳しんとう	竹刀で耳を強打し、負傷	蹴りによる左腹部の強打、上行結腸損傷
事例	柔道部の練習試合中、相手から大外刈りを受けた時、後頭部から畳の上に落下し、頭を強打し意識がなくなった。(脳しんとう)	剣道部の練習中、2人組になって切り返し練習をしていたところ、相手の竹刀が右側頭部(耳の上)に当たり、直後から耳鳴りがするようになった。 (難聴、外傷性耳小骨離断の疑い)	空手部の練習中、練習相手の右足の蹴りが本生徒の右脇腹付近に当たった事が原因で負傷した。(上行結腸損傷)
事故防止のポイント	大外刈りのような後方へ倒す技によるケガが多く発生している。頭部を強打する可能性が高く、重大事故につながる恐れもある。受け身の習得が不十分な下級生に対しては、段階的な受け身の練習を徹底することや技の練習を制限することも重要である。また、技をかける側にも、投げた後で手を離さない等の基本指導の徹底が求められる。	面を強く打たれた際の振動や打撃音によって剣道難聴と言われる状態になることがあるが、剣道用耳プロテクターの使用でリスクを軽減することができる。 また、竹刀破損による眼外傷も発生している。古い竹刀は破損しやすいため、点検や手入れの徹底が必要である。	空手の組み手練習では、蹴りによるケガが多く発生している。技を受ける側の筋力が弱いと重大事故につながる可能性がある。継続的な筋力トレーニングの実施に加え、練習では防具やサポーター等を使用してケガ防止に役立てたい。 また、蹴った生徒の足の指のケガも発生しているため、関節の柔軟性を高めることも重要である。

ボールを介した接触が起こりうる運動

主な運動種目 バスケットボール、サッカー・フットサル、ハンドボール

バスケットボールやハンドボールでは、種目の特性上、人との接触、着地時の転倒、ステップ時、ボールキャッチ時などに事故が起きやすい。また、体育館の壁への衝突や、床が滑って転倒につながる環境に起因する事故も発生しています。

サッカー・フットサルでは、密集地帯での衝突事故、接触による転倒で事故が起きやすく、相手との接触以外にも至近距離でシュートされたボールを受けることによる事故も発生しています。



事例と事故防止のポイント



**ボールを追いかけ壁に衝突し、
頭部負傷**



**接触転倒時の
着地ミスによる膝の負傷**



**相手選手の肘との接触による
眼部の骨折**

事例

体育館でバスケットボール部の3対3の練習中、オフェンスの生徒と競り合いながらボールを追いかけていた時に、ステージ前の壁に頭部から衝突した。
(頭部打撲傷、脳挫傷の疑い)

バスケットボールの練習試合中、レイアップシュートを打とうとした時に、相手選手と接触し、バランスを崩して右足だけで着地した時に、右膝を捻って転倒した。(右膝前十字靱帯損傷、右膝外側半月板損傷)

バスケットボールの練習中、ルーズボールを取り合っていたところ、相手選手の肘が目接触到倒れこんだ。(左眼窩低骨折)

事故防止のポイント

コートと壁の間に十分なスペースがない体育館が多く見られる。特に、バスケットボールのランニングシュートの際は、ゴール裏の壁に衝突するリスクがある。クッションマットの設置等の環境面の対策に加え、安全を確認してから次の人がシュートをする等の安全指導の徹底が求められる。

対人練習や試合の際は、ディフェンスとオフェンスの選手が接触することが多くあるので、体幹や筋力トレーニングを継続的にを行い、身体作りを行うことが大切である。また、空中での接触については、大きなケガにつながる恐れがある。可能な限り審判役を配置し、生徒に危険な接触プレーを理解させることが重要である。

バスケットボールのリバウンド争いの際は、選手同士の手が絡んだり、振り回した手が相手に当たったりすることが多くある。特に身長差がある場合など、相手の手が顔面に当たることがあるため注意が必要である。正しいボックスアウトの姿勢を身に付け、必要に応じてフェイスガード等を着用することも事故防止に効果的である。



**シュートされたボールで強打し、
手指の骨折**



**相手選手の頭との接触による
顔面の骨折**



**相手選手と競り合い転倒、
右足首の骨折**

事例

サッカーの練習試合中、本生徒はゴールキーパーとして参加していた。相手選手のシュートを止めた時、左手母指に勢いよくボールが当たり、親指を痛めた。
(左母指中手骨骨折)

サッカー部の練習試合中、ゴール前で相手選手とヘディングで競り合った際、相手選手の頭が左頬に強く当たった。
(顔面骨骨折)

サッカー部の練習中、グラウンドで対外試合をしていたところ、相手選手と競り合い、転倒した。その際、右足首を捻った。
(右足関節外果骨折)

事故防止のポイント

ゴールキーパーではボールをキャッチする際の手指のケガや他者との接触事故が多く起こっている。キーパーグローブやプロテクター等を正しく着用することに加えて、キャッチングやポジショニング等の基礎技術の習得が求められる。また、筋力トレーニングや柔軟性のある身体作りもケガ防止に効果的である。

ヘディングの際の接触事故やジャンプ後の転倒事故が多く起こっている。基礎技術を習得することや、転倒時の正しい受け身の仕方を学ぶ必要がある。また、危険なプレーを避けるフェアプレーの理解も大切である。筋力が不足するジュニア期に、ヘディング行為を制限する等の配慮も求められる。

ジャンプ後の着地の際に、他者の足の上に乗ってしまうことによる捻挫が多く発生している。偶発的な事故であり防ぐことは難しいが、足首のサポーターやテーピングを使用することで、軽度なケガに抑えることができる。また、他者の足元に入ることが、非常に危険なプレーであることを理解させることも重要である。

バットやボール等を使用し、 原則接触が起きにくい運動

主な運動種目 野球(含軟式)、ソフトボール、テニス、バドミントン、バレーボール、卓球

接触が少ない球技種目では、主に、ボールや用具の操作に関連した顔面や手指のケガ、反転しての移動や着地等によりバランスを崩すことによる捻挫や骨折、仲間との衝突や深追いによる施設への激突等に留意する必要があります。



事例と事故防止のポイント

バウンドした打球の強打による 顔面の骨折	ボールを素手等で 対応した際の指の骨折	バランスを崩しての 転倒による足首の負傷
事例 野球部の試合中、守備をされていてゴロを受けようとしたところ、イレギュラーバウンドしたボールが顔面に当たった。 (鼻骨骨折、鼻中隔湾曲症、左上顎骨骨折)	ボール拾いをしていた際、飛んできたボールを素手で捕球し、右手を負傷した。 (右示指中節骨骨折)	体育館でシャトルのノックをしていて、バランスを崩して転倒し、右足首を負傷した。 (右足関節外果骨折)
事故防止のポイント ボールの捕球時、至近距離での強打時、強打のレシーブ動作、複数のボールを使用する際の予想しない方向からの飛球に留意する。照度が不足した環境での練習の中止や高温の状態での集中力の低下への対策が求められる。	用具を持たない利き手は、とっさに使いがちである。転倒時についたり、ボールに素手に対応したり、ブロックする時に手指の骨折に留意する。体のバランスや柔軟性の強化、予防的にテーピングを使用するなどの対策が求められる。	予想しない攻撃への反転動作時のつまずきや滑りやすい環境でのプレーなど巧緻性の不足などのリスクを軽減したい。特に、雨天時や汗によるコートでの滑倒対策を徹底する。
スパイク後の着地ミスによる 半月板損傷	捕球時の衝突、 転倒による頭部の負傷	施設等への衝突による 脳しんとう
事例 スパイクを打った際、相手にブロックされ、跳ね返ったボールを避けながら着地したところ、足の着き方が悪く、痛めた。 (右膝内側半月板損傷)	ライトの守備にいた本生徒がフライを取ろうとして前方に走った際、同様にボールを追ってきたセカンドの生徒とぶつかり、転倒して地面で頭部を強打した。 (右急性硬膜外血腫)	バレーボールの練習試合中、生徒がはじいたボールを追いかけて行き、窓の鉄格子に激突。左肩と頭を鉄格子に強打し脳しんとうをおこした。 (脳しんとう、頭部打撲傷、左肩打撲傷)
事故防止のポイント ジャンプを伴うスパイク等の動作では、着地時の骨折や捻挫が起きやすい。やわらかい着地動作を練習するとともに、足首の適度な可動域を確保したシューズや保護具等の使用によりリスクを軽減するよう留意する。	原則として接触が起きにくい球技では、予想しない接触が重大事故につながりやすい。仲間との意思確認、事前の守備範囲の確認などの徹底とともに、事故防止を第一に指導することも大切である。	コート外のスペースの狭い体育館での活動時は、特に深追いないルールの徹底、固定用具や施設のセーフティガードの使用など衝突を避ける対策と衝突時の軽減策を講じる必要がある。

概ね用具を使用せず、個人で行う運動

主な運動種目 水泳、陸上競技(短距離走、持久走・長距離走、走り幅跳び)

水泳では前方の者に当たるなど、人と接触した時及びプール底に衝突した時に事故が起きやすいです。陸上競技では、転倒する、足首を捻る、ランニングで足に痛みを感じるなどで事故が起きやすく、それらへの対策が必要です。



事例と事故防止のポイント

前泳者との接触による 手指の負傷	飛び込み時のプール底面への 衝突による頸椎骨折	水泳時のキックが 他の生徒と接触し膝の負傷
事例 泳いでいたら前の人との距離が近くなり、前を泳ぐ人の足が左指に当たり負傷した。(左中指捻挫、左中指骨折)	事例 競泳の飛び込みの練習中、いつもと違う角度で飛び込もうとした際、角度が付かずプールの底に頭を強く打ち付け負傷した。(第5頸椎破裂骨折)	事例 水泳部の練習中、平泳ぎのキックの練習をしていた際、他の生徒のキックした足と接触し負傷した。(左膝関節内側副靱帯損傷、左膝関節捻挫)
事故防止のポイント 同じコースにおける生徒の泳力の差が小さくなるようにする、スタート時に前者との距離を十分に取る、プールサイドから近づきすぎた者の前方に目印を落とすなどの工夫をする。	事故防止のポイント 前方に浅く飛び込む技能を身に付けさせるため、初級者には段階的な指導、中上級者には、慢心せず、常に安全な角度で飛び込むことを徹底するとともに、水深を可能な限り深く保つように管理する。	事故防止のポイント 接触を避けるため、人との間隔を十分に取る、互いに足が交錯しないようにキックの方向をそろえることなどに留意する。指導者のみならず、安全監視係(見学者やマネージャーなど)が近づきすぎた生徒に笛で注意するなどの工夫も必要である。
ダッシュ時の転倒による 足の負傷	着地時に足が滑り 背中からの転倒による脳しんとう	ランニングでの疲労蓄積による 足の骨折
事例 陸上部の練習中、400Mダッシュで走っていた時に、バランスを崩し左足首を捻り転倒し、左足首と左足小指を痛めた。(左第5中足骨骨折、左足関節捻挫)	事例 陸上部の練習中、走り幅跳びをしていたところ、着地で足を滑らせて後方へ転倒し、背中と後頭部を砂の地面に強打した。(脳しんとう)	事例 ランニングをしていたところ左足を痛めた。(左第3中足骨疲労骨折)
事故防止のポイント ダッシュの前に、足首等の関節のストレッチと全身の準備運動を行い、急に走り出すことのないようにする。スパイクやシューズの適合性や確実にひもを結ぶことなどにも留意する。	事故防止のポイント 助走、踏切、着地の一連のフォームを確認し、安全なフォームを身に付けさせる、真後ろではなく、少しでも横方向に受け身がとれるように着地させる、砂場の砂を深めに耕し、滑りにくくする、などの対策が必要である。	事故防止のポイント 長時間の練習、過度な練習の蓄積を避けるため、①適宜休憩をとる②個人差に配慮した練習内容・強度にする③部活動のない日を設定する④痛みを訴えた者は運動を休止させる⑤痛みが続くときは受診により専門家の判断を仰ぐなどが必要である。

用具を使用し、個人か少人数で行う運動

主な運動種目

器械体操・新体操、陸上競技(障害走(ハードル)、円盤投げ、走り高跳び、投てき)、自転車競技、スキー等

固定した用具では、着地時の失敗、バランスを崩した際の用具への強打、転倒のリスクを軽減する必要があります。また、用具を投げる投てきでは、投てき時の事故に留意します。用具を用いてスピードを競う競技では、用具操作のミス発生時のコースや道路等の周辺状況等に留意します。



事例と事故防止のポイント

			
	着地時、関節可動域外への動きによる肘の靭帯断裂	セーフティマット外への着地による頭頸部負傷	着地や転倒時にとっさについた手足の骨折
事例	床の種目の練習をしていたところ、着地で勢いがついたため、右肘が内側に入った。(右肘内側側副靭帯断裂)	高跳びの際、セーフティーマットを超えて頭から地面に着地してしまい、頭部と頸部を負傷した。(外傷性頸部症候群、脳しんとう)	着地の時に、つま先から床についたため右足を外側に捻り痛めた。(右足関節内果骨折) ハードルに足が引っかかり転倒した。とっさに左手を地面についた際負傷した。(左橈骨遠位端骨折)
事故防止のポイント	回転系の動作が伴う競技では、腕の支持動作時の事故防止のため、段階的に難易度を高めることや、練習後半での筋疲労に留意する。跳躍が伴う運動では、転倒の際に、バランスを崩し腕をとっさにつくことによる事故防止のため、転倒時の骨折等があることを知らせ留意させる。	回転が伴う運動や体を投げだす跳躍が伴う運動では、頭部からの落下、器具への頭部の衝突、背面からの着地による頭頸部の負傷に留意する。想定される着地より広いエリアへの安全対策の検討、必要に応じて練習時のヘッドギア等の使用、技能レベルに応じた段階的な練習を徹底する。	跳躍を伴う運動のうち、器械体操や新体操では、着地時にバランスを崩し、膝や足首を捻るなどのケガ及び高度な技を練習する際の補助、力量に応じた段階的な練習の組み立てなどに留意する。ハードルでは、転倒時の事故防止に向けた事前の準備運動を行うことや転倒技術を高めておくことが重要である。
			
	投てき器具などの衝突による前額部の負傷	スキー中の転倒・衝突による負傷	新体操の練習中、補助者が体にのり手指の骨折
事例	本生徒は円盤投げの補助員として配置された。円盤投げサークルから22～23m離れたラインの外側1m付近に立っていたところ、他の生徒の投げた円盤が左にそれて、本生徒の右こめかみ部分にぶつかった。本生徒は円盤から目を離しており、審判員の「あぶない」という声に反応できなかった。(右急性硬膜外血腫)	スキー合宿中、林間コースを滑っている途中で転倒し、頭と顔・胸腹部を強打し意識消失した。(肝損傷、脳しんとう)	新体操部で、補助をしていた他の生徒の体重が右手の中指にかかり負傷した(右第3指末節骨折)
事故防止のポイント	安全上のガイドライン等において、実際に投てきを行う際には、十分な広さの確保、防衛ネット等を使用し、安全な待機場所での待機、他の種目練習との時間をずらす、投てき時の合図の徹底などが示されているが、これらの実行の徹底と定期的な確認を怠らないようにする。	用具を使用し、スピードやタイムを競う競技においては、衝突への対策としての保護具等の使用はもとより、用具の故障による事故防止のための点検が重要である。また、天候の変化による視界不良や雪面、地面等の変化でリスクが高まるため、練習の制限等の判断を的確に行う。	用具を使用し、個人か少人数で行う運動においても、練習中の事故の発生は多く報告されている。一般的に個人種目では、動きを効率的に高めていくための練習に多くの時間を費やすことから、サポート技術、筋肉の疲労や集中力の低下に留意したい。



準備・整理運動での事故防止のポイント

準備・整理運動は、運動時のケガや疾病の予防のために行う運動ですが、これらの最中にもケガや疾病が発生しています。準備・整理運動においても油断することなく、緊張感をもって実施する心構えが重要です。
※8、9ページは重症事故のみでなく、運動部活動の事故を対象としております。



練習環境の確認

事例

バレーボール大会のウォーミングアップのため走っている時に、アスファルトのくぼみに足を取られて転倒した。その際、右足を捻るとともに、右膝を擦った。

主な要因

準備・整理運動中のケガは、比較的日常的で単純な動作中に非日常的な事象が重なった際に発生するケースが多いようです。練習中であれば不意にボールが転がってきて避け損ねた場合や、競技会などでは、いつもと違う練習環境に十分に対応できなかった場合などがあります。

事故防止のポイント

偶発的な不可抗力に伴う事故もありますが、練習環境の安全管理は生徒、指導者ともに確認し合いながら実施することが重要です。



体調の管理

事例

ラグビー部活動での遠征3日目、前日から体調不良を感じていたがそのまま活動に参加し、試合前にウォーミングアップのため走っていたところ、急に気分不良になった。その後、涼しい場所で休養していたが頭痛が強まり、高熱が出て動けなくなった。

主な要因

練習参加時の体調不良が大きな要因と言えます。また、運動時の熱中症はランニングなどの「走る運動」中に発生することが多く、運動開始後30分程度でも発生することがあります。

事故防止のポイント

練習開始前の体調チェックは指導者と生徒によって行うようにしましょう。また、指導者は生徒が体調不良を感じた際に、申告しやすい雰囲気づくりに配慮することが重要です。

疲労を考慮



事例

陸上部のクールダウンで走っている際、地面に置かれた用具（カラーコーン）を拾おうとした。他の生徒も他の用具を拾おうとして交錯し、その生徒の足につまずいて転倒し、左手を地面についた際に受傷した。

主な要因

練習の後半は、精神的にも肉体的にも疲労状態となるため、集中力や判断力が低下したり危険回避動作が緩慢となったりする可能性があり、通常は回避できるような小さな障害でも適切に対応出来ない場合があります。

事故防止のポイント

整理運動もトレーニングメニューの一つとして、複数の作業が混在することの無いような環境づくりが必要です。また、疲労の影響に十分配慮したメニューを作成することが重要です。



筋力トレーニングでの事故防止のポイント

中学生・高校生等の筋力トレーニングはバーベルなどの重量負荷を用いたウエイトトレーニング時の受傷よりも、自重もしくはラダーなどの軽い器具を用いたアジリティートレーニングやサーキットトレーニングといった複合的トレーニングによる受傷が多い傾向にあります。適切な運動パターンやフォームの修得を意識してトレーニングスキルの向上を心がけましょう。



正確な動作

事例

サイドステップのトレーニング中、左に進んでいたところから右方向に切り替えようとして、左足首を内側に捻り負傷した。

主な要因

複合的なトレーニングを行う際にスピードや回数を意識し過ぎると、適切な姿勢やフォームが疎かになり、受傷のリスクとなることがあります。

事故防止のポイント

筋力トレーニングの効果は、正確で安定したフォームの反復であり、この動作に負荷を加えることによって得られることを意識しながら実施することが重要です。時々、再確認のための声掛けなどを行いながら実施することが重要です。



安全なメニュー

事例

野球部の活動中、格技室で網を登るトレーニングをしていたとき、手を滑らし落下した。着地時に、左足を強く捻った。

主な要因

筋力トレーニングは、しばしば意図的に本来の（専門としている）競技とは異なる動作を取り入れて実施される場合が多く、トレーニングを実施する生徒と指導者のトレーニングスキルと受傷リスクの回避に関する十分な理解が必要です。

事故防止のポイント

パフォーマンス上の課題からトレーニングの対象となる筋肉や動作が抽出されますが、実際のメニュー作成時には最大限リスクを回避した内容で作成することが重要です。落下や衝突などの高エネルギー外傷の危険を伴うトレーニングは、十分なトレーニングスキルを習得（研修）してから実施することが重要です。



重量負荷は十分な安全確認を！

事例

野球部の練習中、屋内練習場でバーベルを担いでスクワットをしていたところ、バランスを崩してバーベルを後ろに落とした。その時、右手中指先端部を切断し負傷した。

主な要因

重量負荷を用いたウエイトトレーニングは、適切なフォームで遂行できないと大きな外傷リスクになります。最大能力に近い負荷や回数を実施する場合は十分な注意が必要です。

事故防止のポイント

重量物を扱うトレーニングにおいては、転倒や落下物による負傷のリスクを十分に回避できる環境を整備するとともに、トレーニング実施時の補助体制も十分に整えることが重要です。

実際の裁判例から考える事故防止

過去の裁判例からは、どのようにしていれば法的責任を負わずに済んだのかということだけでなく、原因や予防策を考えることができます。今後同様の事故を起こさないためにも、過去の裁判例を振り返り、安全への配慮を尽くしていくことが求められています。

※一部、運動部活動以外での事例を含む。

事例 1

危険な状況が顕著に表れる前に、具体的な措置を行いましょう



事例の概要

高校ラグビー部の1年生が紅白試合中(スクラム時)に重症を負った事故について、指導教諭に安全配慮義務違反があったとして学校側の法的責任が認められた。

裁判例の結論

試合経過を通観すれば、両チームの力の差から、随所に本件事故に繋がるスクラムの危険な状態が具体的に現出していた。ラグビーを始めて間もない1年生の被害生徒を危険なポジションに起用していることを認識し、試合の具体的局面において、被害生徒の安全に十分配慮することを期待されていた指導教諭としては、遅くとも、危険な状況が顕著に表れた事故直前のスクラムの時点で、危険状況が再び発生しないように安全のための具体的な措置を講ずるべき義務があった。

裁判例のポイント

練習中に危険な状況が顕著に表れた場合には、危険に対する注意を促したり、練習を一時中断させたりして、安全のための具体的な措置を講ずる必要があります。

事例 2

事故防止の計画の設計を行い 競技中にはケガ・事故に対して注意を払いましょう



事例の概要

小学4年生の児童が体育の授業のミニバスケットボールの試合中に、他の児童の手が左眼に強く当たったことが原因で失明した事故について、担当教諭に過失は認められないとして学校側の法的責任が否定された。

裁判例の結論

担当教諭は、体育の授業としてミニバスケットボールを実施するにあたり、学習指導案を作成し、これに従って、まず春季の授業において、ミニバスケットボールのルール、特に相手との身体接触によるファウルについて、指導、学習を行っていた。小学4年生の児童としても身体接触によるファウルについて、相当程度の理解を有していたものと認めるのが相当であり、事故当日の体育の授業において、同教諭がしたチーム編成、コートの使用法、授業運営等について、それ自体として特に相当でない部分は、見出し難い。そのような授業中、通常の方法で行っていた競技の最中に生じた事故について、担当教諭が体育の授業でミニバスケットボールを実施するに際し、競技中に生ずるおそれのある事故の発生を未然に防止すべき注意義務を、児童が主張するような趣旨で怠っていたと認めるべき証拠はない。

裁判例のポイント

事前に事故防止のための計画を立て、競技中にも相当程度の注意を払っていれば、結果として事故が発生してしまったとしても、学校側の法的責任が常に認められるわけではありません。

事例 3

危険性の高い練習では、最大限の安全配慮を行いましょう



事例の概要

高校野球部のハーフバッティング練習中、打球が投手を直撃し頭蓋骨骨折等による障害が生じた事故について、野球部監督（教諭）に安全配慮義務に欠ける過失があったとして学校側の法的責任が認められた。

裁判例の結論

ハーフバッティングは、実施の時間帯や方法の如何によっては投手にとって危険性の高い練習方法である。投球距離を短くしてハーフバッティングを実施する場合には、投手が投球後直ちにし字型防球ネットの高い部分に身を隠すよう指導するほか、必ず明るさなどの条件がよい時間帯に行い、投手の投球距離等についても状況に応じた調整をする等、きめ細かく安全に配慮したうえ実施するべきものである。

裁判例のポイント

練習の実施状況（投球距離の長さ）、周囲の明るさの状況等、練習時の具体的な状況に応じたきめ細かい指導を心がける必要があります。

事例 4

危険が伴う練習に対しては、具体的な事故防止の方法を示しましょう



事例の概要

高校2年生の生徒が水泳部のクラブ活動後の居残り自主練習の際、プールの飛び込み台から逆飛び込みをしてプール底に頭部を強打し傷害を負い、後遺障害が生じた事故について、水泳部の顧問教諭に過失があったとして学校側の法的責任が認められた。

裁判例の結論

課外クラブ活動の居残り練習について、一般的には顧問教諭の立会による指導までは予定されていないし、そこまですべき義務はないというべきである。しかしながら、具体的状況の下で事故発生の危険性を予見することが可能な場合には、顧問教諭は、居残り練習の場合といえども練習に立ち会うか、それに代わる適切な措置をとるべきである。

裁判例のポイント

具体的状況の下で事故発生の危険性を予見することが可能な場合には、居残り練習の場合といえども、練習に立ち会って監督指導することが望ましく、そこまでできないとしても、危険な練習を禁止するか、少なくとも、事故防止のための方法を具体的に示して注意を促しておく必要があります。

事例 5

生徒の能力に応じた、個別的で段階的な指導を心掛けましょう



事例の概要

高校生が体操部のトランポリンの練習中、宙返りに失敗して重症を負った事故について、顧問教諭に過失があるとして学校側の法的責任が認められた。

裁判例の結論

体操競技の実技訓練を行うクラブ活動においては、部員である生徒各人の技の熟練の度合いが異なり、日々の段階的な練習が必要とされる。また、その試みる技の種目が高度なものになるほど、危険性が高くなり、場合によっては死亡、重症事故を招く危険性がある。したがって、その危険性を防止するためには、指導担当教諭は、絶えずクラブ活動全体を把握して生徒の技の習得状況、熟練度に応じた技の練習をさせることにより、できるだけ危険を防止すべく綿密な実施計画を立て、これを生徒の状況に応じて実施するよう徹底させることが必要である。

裁判例のポイント

技の危険性が高く、また、技の熟練の度合いが個々人で異なる場合には、生徒各人の技の習得状況、熟練度に応じた技の練習をさせる必要があります。

おわりに

安全な運動部活動の実施には、指導者の配慮、努力が不可欠です

安全を確保することはすべての運動部活動実施の前提条件です。安全が確保できることにより、子供たちが安心してのびのびと活動に打ち込み、本来の能力を発揮できることにつながります。そのため、指導者には、過去の事故事例の把握や発生原因、防止方法の理解と必要な指導や危機管理の実施などが求められています。

本パンフレットは、運動部活動を主対象に、「人・設備との接触」と「用具等の使用」の観点から、事故に関連する特性を考慮した5つの運動分類別に分け、専門部会において医療費を支給した事故を分析し、事故防止のポイント等を整理したものです。「学校安全Web」の他の資料等と併せて、事故防止の参考としてご活用ください。

執筆者一覧(法人名・敬称略)

◎は部会長

北村 光司：産業技術総合研究所
主任研究員

木宮 敬信：常葉大学教育学部教授

佐藤 豊：桐蔭横浜大学スポーツ
健康政策学部教授

◎戸田 芳雄：日本安全教育学会理事長
学校安全教育研究所顧問

中嶋 耕平：国立スポーツ科学センター
副主任研究員

溝内 健介：清水法律事務所弁護士

関 伸夫：スポーツ庁政策課
(アドバイザー) 教科調査官

その他の資料等はこちらからご確認ください。



骨折事故防止パンフレット「なくそう! 骨折事故」

体育活動中の事故について、骨折事故はいずれの学校種においても、負傷・疾病の種類別で最も多く発生しています。

体育活動中に年間15万件もの骨折事故が発生し、中には後遺症が残る等、重症化してしまう骨折もたびたび発生しています。安全な体育活動の実現に向けて、骨折事故の現状を知り、予防策について考えるためのパンフレットです。



学校安全Webでは様々な情報を発信しています

学校安全Webでは、学校の管理下における事故防止のための情報、調査研究の成果、各地域に密着した情報を掲載しています。また、すぐに教材としてご使用いただける資料も提供しています。

学校現場で役立つ情報を随時更新していきますので、ぜひご覧ください。

学校安全Web

検索



令和4年3月 初版

編集・発行：独立行政法人日本スポーツ振興センター 学校安全部

TEL：03-5410-9154

URL：<https://www.jpnsport.go.jp/anzen/>



※本パンフレットは学校の様々な活動で使用することを目的とする場合に限っては、コピー、送信、配布等のあらゆる非営利目的の利用が可能です。その他の目的による複製、転載、引用等については必ず以下のサイトをご確認ください。

URL：<https://www.jpnsport.go.jp/anzen/tabid/520/Default.aspx>

